

# ソロレタリヤ通信

同盟が四回中央委員会は去る9月×日×日の二日間、東京において開かれた。四中委において我々は、侵略反革命の統一の把握にたち、この向の同盟諸活動の総括を検討し、70年同盟の諸々の基本的組織活動を意志一致した。さらに四中委において、日本革命論・70年代階級斗争論・70年安保斗争論が討論の前面におかれた。かかる意味で斗争論・革命論の発展の突破口をひらいた。

四中委は、これまでの、七回大会以後のものが同盟中央機関の政治組織的討議と異なつた局面をひらいた点で西期的意義をよもっている。われわれが検討しはじめた論議、四中委において論議的に展開されはじめた討論は単なる戦術上の問題で固定化されるべきものではなく、七回大会路線を革命論としてさらに人民の規模におこひろげるなかで我々自体が革命的階級形成・党形成の、初的指動力をいかにうちたてるか、そしてかかる階級と党が权力を奪取し、維持しうるかという実践的意味においての戦略論的論議として理解され発展されねばならない。我々は日本革命Mにおいて実践的に打伴されてきた、そして又、打伴されつゝある諸理論のすべての教訓を組織化し、主体化した党派としてあるかぎりにおいてのみ、真に革命的な党派である。わが同盟政治局はこの点をつよく踏まえ、四中委を総括していること、かくてまた至中央委員、至同盟諸君にかかる意味において四中委をうけとめ、発展させる活動に集中するよう期待するものである。

本文において、我々は同盟活動の諸総括を要約し、四中委討論を総括する。読者における「任務・方針」的性格をきつた部分を「共產主義」12号の冒頭論文として編集・発行する予定である。

## ① 同盟活動の総括

① この向の階級斗争と大家の自然発生性および革命的左翼の課題

① 四月以降の階級斗争の進展は、従来の反戦斗争においてその戦略的課題がさらに至面化したこと、ソ連リスターリン主義圏における矛盾の激化、さらに至世界的な帝国主義諸

① における階級危機の前進として要約される。  
② 3月31日ソ連の声明を直接の契機に至面的に戦后帝国主義世界の幼稚・崩壊・再編の混在した国際政治過程が現出した。即ち米帝国主義は他帝国主義の再分割と即自的世界反帝統一戦線の急迫におこまれ、侵略と反革命を統一しえず、経済的再建を追求しつゝ、と和平の幻想をふりまきつゝ、国際的「反革命戦線」に西独・日本等をあらたに本格的に組みこみつゝ、自らの帝国主義へゲモノニまうちたてようとしてきた。

③ 西独・仏帝国主義は米帝国主義にとつてかわり、反革命を独自に担う力量をもちえていないことから、市場再分割戦を激化させつゝ、政治的軍事的争いを国際的「反革命戦線」強化のへゲモノニ等しいと表現せしめたのである。(西独非常事態法、部分核停への対応、仏帝の五月勅諭とNATO接近)

④ 日帝はこの時代への世界戦略を深刻に向われた。自由化一年を経過した日本資本主義は、自由化は本格的にアジア・太平洋ににおける米帝スルジョアジエとの「競争と協同」の時代に入っていた。他方国内階級関係・支配力・軍事力における弱さと国際的「反帝統一戦線」の反戦Mの昂揚が相乗的に作用し、アジア侵略の独自の展開と国際的「反革命同盟軍」の強化という相反する矛盾をかかざるをえなない。これを日米反革命同盟の日帝による再編強化に70年政策として解消しようとするのが日本スルジョアジエ主流と政治委員会の統行点である。

⑤ 世界反革命戦線のこの動向にたいし、世界反帝斗争の昂揚は、意識的に自由帝国主義の打伴、安保、NATO解体、ベトナム革命の勝利の反帝統一戦線の形成へとたかめられねばならなかつた。  
だがバトコン内における和平反戦ソ連派の指し示す方向は、先述のILAS路線の再編にあり、この前線とすむ段階の後進的「革命」が世界革命の西独・非常事態法と等しいか否か、は、国際的「反革命同盟」の急迫と混在にあり、この「反戦」は、自衛的「反帝」の再編の必要をあらわすこと、この「反戦」の必要をあらわすことである。

※この尺階を説明する標準(革命的見組織論)を完全に獲得し得ぬ現段階において、われわれはこの問題を当面我々が到達した政治的段階との関連で検討し、前進しなければならぬ。

二の点から見れば尺階のオ一は、我々が隠微期世界に帝位主義の体系、その連統的革新政策として獨尊及革命/抑圧をとりとえることのみを充分であり「不向野発展」の固定化に陥つていたこと。オニはしたがってこの現段階における反帝斗争を并算し「一口反帝斗争」として総体的に即自的な反帝斗争より口際的な口際形態において理解することが十分であつたこと。オニにそのことは革命論において日帝主義と一口革命の諸条件和斗争論論の前者の結果と前者の暗黙の帰結といつた形での世界同時革命論としてよくくみこむに理解されつたこと。

二の二では他方からトナム反戦一革命打倒主義的傾向を生み出し、ASIOAC斗争の監視⑧同盟のみが種々を偏向や不十分性を包みつつも、自口帝口主義打倒、抑圧、NATの解体トナム革命勝利の斗争及統一戦線形成に向けASIOAC、反帝斗争の再編換化を通じてASIOAC階級長に与る斗争一口反帝統一戦線の意識的創出として目的意識的に斗いぬいたのであつた。

及むる困難を斗い切り開き得た根拠こそ前盟才七回大会路線の正しさ起因するものである。二を我々が再確認すると同時に及むる各月までの路線が不十分にして貫徹されなかつた統一的根拠を指摘しなればならぬ。

⑦ 我々は口際及び身において、とくに全管理所としてめられた我々の尺階の根拠について部分的に指差した。この由縁は政治理論/組織理論として個別に述べ得ぬところの由縁である。しかしその全体として

※として結果した。

そこで又二の尺階は同盟の統一戦線において小又は急進主義/反米主義/即時的反帝主義を包括し得ず、単純な反帝主義に傾斜した根拠であつた。

⑧ だが4/5/7月斗争の過程で我々は斗争反帝統一戦線の分析=再編過程を自口帝口主義打倒の

必然性、それを自口帝口主義的軍隊の秘密的解体斗争に収斂する革命的反抗斗争へ指導しつとて、またここでまた政治的を方向は正しくなつた。

たがかりの方向が口際的反抗斗争の一環として貫徹し得なかつたこと一即時的斗争の単なる切捨てとなつためりられた根拠を問題として反付けばならぬのであつて、自口帝口主義打倒そのものを清算するようになつてあつてはならぬ。

⑨ さてこの尺階について十分な反省を考へてみよう。

トナム人民の斗いを枚軸にした反戦斗争の進展は確切の地位にあってはより大衆的基礎を米帝進撃トナム人民を奮起させる拡大させ、前進させつつも運動の執事オ一線に於ては本衆の自然発生性を阻害しつつ自口帝口主義打倒の革命斗争に転化させることとめぐつて分析し再編せざるを得ない。

そのことは和平という幻想と暴力を結合させてこの攻撃を妥協しなればならぬ意味に於て極めて困難な高度な指導性及革命的反響に与りなつて復す。

日本帝口主義の優勢と反革命の増大と日米反革命共同行動反戦斗争は、10、8、11、12に於て切崩れ、引き出された本大を自然的発生のエネルギーは復元して和平を欲、軍事打倒論を権力の暴力装置と全面的に立止ることを圖つて、ASIOACに分析しつつ再編を以てした。かかる局面での本衆の自然発生性、其目的の自對反革命行動に対する噴發、直線的な反戦力意識の中に潜む目的意識性の萌芽は、日帝の侵略反革命の全体に対する対策である。幼稚な再編一崩壊に陥りつつある世界同時主義の全体を秩序下打倒と世界的規模での「口際」タリテの解決である。勿論二からは複雑に有地的に連関してある正に二の複雑な有地的連関こそが革命的左翼として由縁である。

① 米帝(主)の革命後退とトコソ先頭とする

国際的政敵からの政治後退、そこからの世界プロレタリア人民の一環として動搖し破局を迎えつつある。マルタ体制の打倒の方向、かかる動向は帝(主)諸国の革命的危機の相違的結びつきつ世界同時革命の動向を創り出しつあった。②他方米帝(主)以外の諸国に於ては、米帝(主)と二分對立直りつつ、とりわけ西独、日本米帝(主)とつて代つて新たな過渡期世界の盟主として侵略と反革命と統一せんと志向しつても単独に於ては、それを實現しえず古いマルタ体制の内部再編を通じて侵略、反革命と増大せしめることに対し、革命的危機と背景に(1)の動向と長期的全体的な総体としては結びつきつつも、或いは(1)を構造的背景にしつつも相対的独自に、日帝の侵略反革命(内)より(外)の動向に対する反響の動向である。これは(1)の動向は革命的左翼の側においては見落され、或いは革命斗争の面にだけ、限られたりしていたが、(1)の動向、或は(1)段階の要因は日帝のカミカ侵略、反革命路線の一端であり増大の途をたどりつつも、現存的には決定的村軸でありつつも、にも拘わらず、その一翼としてあった。従つて(1)の動向を徹徹して追ひ込んでいけば、それが革命斗争に転化した(1)の自然発生性(主)組み込み包摂するとは言ふなり。

明かに(1)の動向を展開し拡大せつつも、他の別の侵略反革命の諸形態(アメリカ外交、自衛隊の海外出兵、沖縄返還等)との斗いが同時併行的に推進され、その総体としての自(主)帝(主)打倒革命斗争(主)である。

⑩ 現在不均等発展が進展し、革命的市場再分割が激化しながらも他方で日米関係や西独一米関係が分断一解体に向かわず逆に安泰、NAATOが強化され、その日(主)米、西独(主)米関係の荷(主)手の再編(主)争として再現されている事象を、着目しなればならない。かかる事象こそ、着度期世界の矛盾の核心がひもとかれている。

かかる一見(主)争ともみえる事象に対し、現段階の階級斗争の自然発生性の路とも結合し、中核派と先部とする小ブル派は帝(主)論を修正し、超帝

日(主)論に乗り、レーニンの日(主)と革命の原則までも修正した。

(主)日米運命協同体論、日米合同権力論(主)関係体制論、日本は沖縄奪カンを野望してなり等だが同時にレーニ(主)帝(主)論の貫徹一般を主張し、全ての事象をかかる法則のみの下に規定づけることも出来ない。正にレーニ(主)改革(主)ギ、古典マルクス(主)ギであるが)

ここからは大衆の自然発生性、諸段階の分析に従つて特殊な日帝の動向分析等は全く引き出し切れず、大衆の自然発生性、反戦、反革命、反米に物化し、国際性(主)平坂(主)コスモポリタニズムへと物化せしめる。

正に問題の核心はこうである。既ちベトナム人民の斗い(主)村軸とした即時な世界各(主)反帝統一戦線が、(一)次労働者(主)家(主)含む(主)日米帝(主)主(主)者の動向と不均等発展の革命要素からと同時に、深く規定しはじめられているからである。正に革命的要因と同時に階級斗争の要因が日帝の政(主)動向と日米関係を規定していたのである。

⑪ このことは、即時的世界反帝統一戦線に村軸をもちつつも、ロシア革命以降、ここにオニ次(主)帝(主)ギ戦争に至る労働者(主)家(主)の成立をもちつて普遍化した過渡期世界の根本的性格に起因するものである。

今こそ、革命的左翼はパリ平和会議、仏五月革命、チエコ問題、安保、NAATOそれ以前に於ては中(主)文(主)等(主)過渡期世界とその危機の段階、性格様式を確定し、それを総体化して把握するのではなく(主)体制(主)論、帝(主)ギ(主)崩壊(主)論、構(主)論(主)を(主)主(主)体的な世界革命戦争、世界同時革命、世界革命戦争、世界各(主)反帝統一戦線、世界一各(主)党の問題として主(主)体的にとらえねばならない。

⑫レーニン帝國主義の根本法則は、一つは日本帝國主義の現段階に適應を要し、日本階級主義の總体を把握するには不可欠に過渡期世界の工業的構造的認識が必らずとされれば不可避として主体的には過渡期世界一國革命戦争や世界一國反帝統一戦線、或いは、世界赤軍の創出と世界革命戦争の遂行の路線が設定される理由は、レーニン帝國主義の經濟法則が貫徹しなかつても、革命的危機の發生的形態やその政治的現形態は労働者階級と世界階級主義に制約され、その制約を逃れつつ表現するにのみならず、表現形態を規定せしめていゝる。⑬内階級主義も現実的世界的結合の二倍以内階級の性格を具體的現象的にも、ついで、さうであるが故に世界階級主義と、労働者階級の運動に密着不可分に組みあひ、相互に制約し合つてゐるが故に、一國の階級主義の指導性は一國にのみならず、また、世界赤軍階級主義の指導性としての自由階級主義打倒の路線として指し示されねばならぬからである。

亦三に、帝口主義一國の危機も、帝口主義一國としてあるのではなく、他階級主義や後進國として労働者階級の危機と有機的に結合つき、連鎖的、同時的危機として発露するからである。

われわれは、二の観念に立つて内階級主義を組織し、内階級反帝統一戦線形成への突破口をひいた。⑬これは七月八月自軍の基調の注目をせず、さうには二の間の階級主義の到達迄を拒するものであった。即ち内階級プロレタリアート人民が結合する手続の同時的突破内階級反帝統一戦線に發展・強化することが革命的左翼に向われたい、た。

だが、中核派ははじめとする自党派の小ブル資產主義運動論の固定化、そしてその党派主義的組織化は大衆組織をかかえる意味の統一戦線に發展させえず、党派系列化を横行させていた。反帝青年の系列化、全労働分裂の構造的要因は二にあらうた。

としてわが同盟も、上回大分をおける反帝統一戦線問題の次元で發展させることができず、また言論派、M.L派の党派主義を拘束しえず、反帝同盟連入会へ二の諸派をまき込みえなかつた。

⑭反帝同盟の指導に於ける階級主義の系列化は、その政治的意識の上であり、レーニン主義を許しなかつた。

はわが同盟中央指導部の組織指下の見解の著述であつた。この問題については二に示される。

⑮我々が二の期間の政治斗争を昇格し、かつ次の局面をひくくものとして斗つたならば、この意味における過渡期世界總体のなかにおける内階級の侵略・革命路線への斗争としての位置を鮮明にせず、A.P.R.C斗争自体の先駆的意義にもかかわらず、われわれの党派的位置を合理的に強化しようとする結果を伴ふことができなかった。總体としてかかる内階級主義のなかにも、わが同盟は二の間の階級主義の立場において革命的左翼の課題をもっとも鋭く提起しつつ、主体的にこれを克服する作業を推進しえなかつたことを自己批判的に総括しなかつた。

B. 中心的諸斗争と運動論  
⑯それは単に我々の政治問題にとどまらず同盟問題は、

労働者階級斗争を我々は前社的斗争として位置づけ、労働者の指導と組織に於ける階級的斗争として展開した。このかがり二の斗争は単純斗争として内階級反帝統一行動におけるものとは異なる位置をもつていた。われわれはまた二の政治大衆の結合環一般に於いて組織化の運動と變遷の過程を二に示した。

二の前の二戦線的斗争は、階級主義の政治的意識統一と組織的準備に於いて二に於いて達成したものであり、またそれにはじめて階級的力量を教信にも転換させると二の斗争であつて、攻撃的階級斗争一般の技術問題として一般化されたは行つた。

⑰六月斗争より本格化した米軍基地撤去、軍事生産、同軍輸送阻止は、二れと対応的に大衆との結合現象の自覚にも鮮明にした斗争であり、反帝斗争の高揚局面をつくりだした。

わが同盟は二の斗争を政治的侵略の準備と見做して、全回の規模での軍事